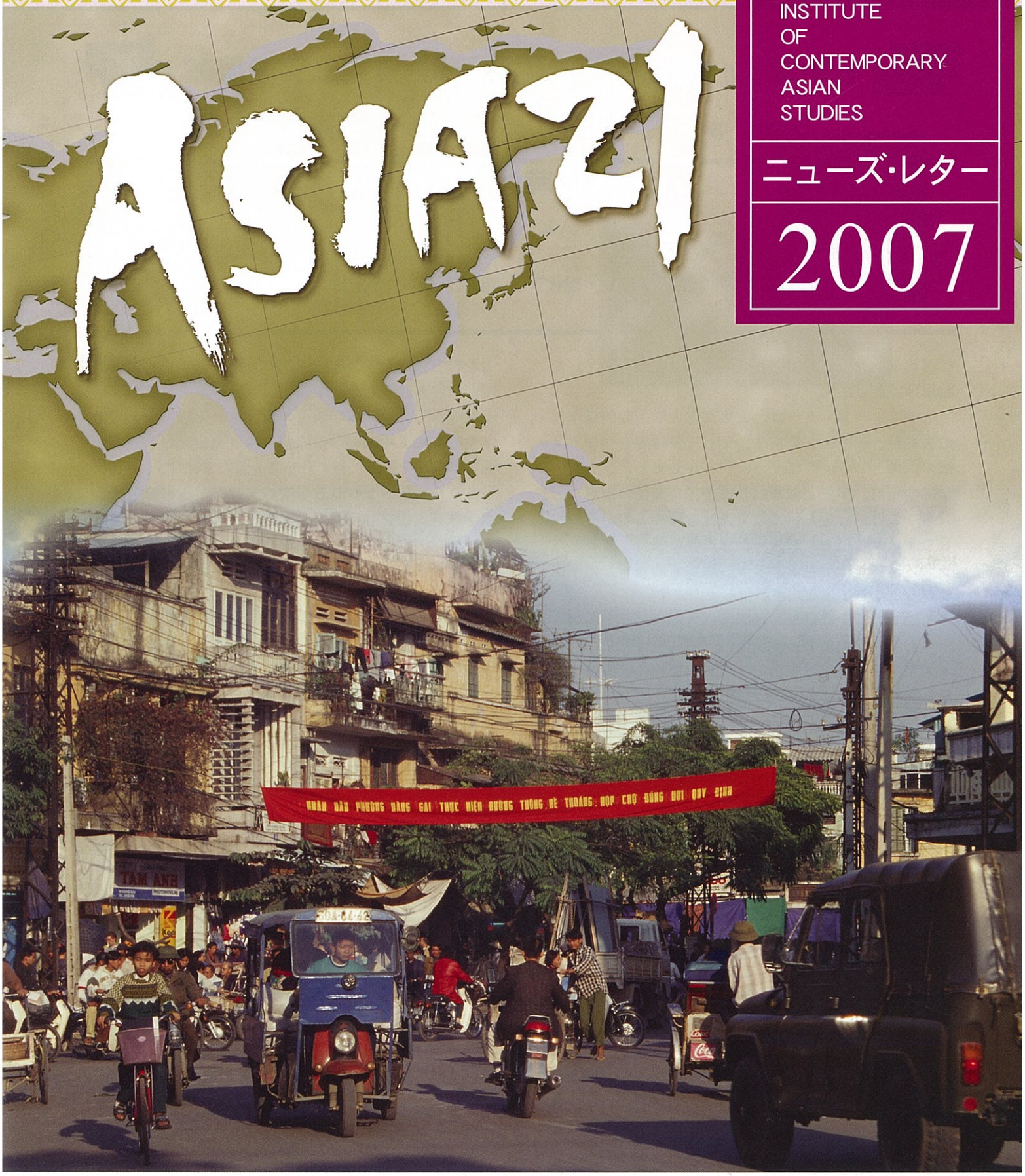
ASIA21

INSTITUTE OF CONTEMPORARY ASIAN STUDIES

ニューズ・レター

2007



旧市街（ハノイ）

DAITO BUNKA UNIVERSITY

国際関係学部・現代アジア研究所

巻頭言…近況報告を含め

次の時代にむかって

国際関係学部長・現代アジア研究所長　押川　典昭

「ニューズレター２００７」（ＡＳＩＡ　２１）をお届けいたします。

このニューズレターは、大東文化大学国際関係学部の教職員、在校生、卒業生、そして保護者をつなぐ共同の広場として、昨年リニューアルしました。大学・学部の現況、学生と教職員の様子、卒業生の消息など、身近なことがらをお伝えして交流を深めるのがその役目です。今号にも、20周年記念式典の報告、アジアミックス、スピーチコンテスト、現地研修報告、留学生リポートなど多彩な記事が並んでいます。

ここでは、それ以外の国際関係学部に関連するニュースを挙げておきましょう。

大東文化大学では東松山市と東京都板橋区高島平、新宿区信濃町（法科大学院）の３つのキャンパスを持っていますが、国際関係学部のある東松山キャンパスは今年で開設から40年を迎えました。この間、学部学科と学生数が増えるにつれて、さまざまな施設が整備されてきましたが、すでに老朽化したものもあります。そこで、より良い教育・研究環境を整えるために、東松山キャンパスの再開発事業が始まりました。

その第一弾が総合グラウンドの建設です。これまでラグビー場、野球場、テニスコートなどはありましたが、キャンパス内に陸上競技場はありませんでした。このため、陸上競技の公式大会が開催できる本格的なグラウンドの建設が、２００８年夏の完成をめざして始まりました。体育実技の授業で使用するほか、箱根駅伝の常連である陸上競技部をはじめとする運動クラブの練習場となります。夜間照明のもとで練習する選手たちの姿が見られ、応援にもいっそう力がはいることでしょう。このほか、東松山キャンパスの再開発事業として、新しい校舎やセミナーハウスの建設などが計画されています。

第二は、大東文化大学北京事務所の開設です。近年、中国との交流はいっそう拡大し、経済分野では、中国との貿易総額は22.2兆円に達し、対米貿易を抜いて第一位になっています。こうした中国との結びつきの深まりを背景に、２００７年６月に北京外国語大学の協力を得て、同大学の施設内に大東文化大学独自の事務所が設けられました。中国における本学卒業生のネットワークづくり、本学からの留学生の支援、中国人留学生の募集、中国の学術機関との研究交流などがこの北京事務所を拠点に行われることになります。

２００６年～２００８年度の文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」に選定された国際関係学部の「アジア理解教育の総合的取組」は、重点事業の２年目を迎え、「高校生のためのアジア理解講座」、鳩山町との連携事業「大豆のアジア学」、東松山市との連携事業「アジア芸能の夕べ」などが行われています。また、このプログラムに関連して、アジア地域言語教育強化のためのオリジナル教科書の作成、アジア各国の協定校からの招聘教員による集中講座の開催（今年度はタイ語、ベトナム語、ヒンディー語）、基礎ゼミ用のテキストの発行、英語教材の開発などが進められています。

ところで、日本の大学は今、明治時代に大学制度ができて以来、もっとも大きな転換期を迎えているといって過言ではないでしょう。その背景にあるのは、わが国の歴史上はじめて経験する人口減少という事態です。１８歳（大学受験者）人口は、１９６６年（昭和41年）の２４９万人をピークに減少を続けて１５０万人台まで落ち込み、９２年に２０５万人に回復したもののふたたび減少に向かい、今後１０年間は１１０万台の後半から１２０万台の前半で推移することが統計上確実になっています。この間、大学の数は増加の一途をたどってきました。今、起きているのは、減少する１８歳人口の獲得をめぐる大学間の熾烈な競争です。

こうした未曽有の時代を乗り切って、大東文化大学と国際関係学部がさらに発展を続けていくためには、生半可な覚悟では務まりません。どうか私たち教職員の努力と、学生諸君の頑張りを見守り、ご支援くださいますようお願い申し上げます。

20周年記念式典・祝賀会報告

国際関係学科　１９８９年度卒業　　宮崎　義彦

卒業後はじめて２０周年記念式典の会場である記念講堂に入りました。この講堂は入学式と卒業式を行った場所として思い出深い場所です。入場してお世話になった先生方や１期生の顔を見た瞬間に、学生時代に戻った気分になりました。１６年振りにお会いしたのにも拘わらず、名前がすらすら思い出せました。

記念式典では、１９８６年の学部創設から現在にいたる学部の動向等について報告がなされました。創設当初は次年度のカリキュラムさえ決定されていなかったこと、現地研修も全く手作りだったこと等が思い出されました。式途中、既にお亡くなりになられた先生方のお写真を見たときには、先生お一人お一人の思い出が蘇り、思わずこみ上げるものがありました。

最近は文科省の「特色ある大学教育支援プログラム」（特色GP）などの補助金が得られるまでに学部が発展してきたことに感慨深いものがあります。またAsia Mixなど様々なイベントや、充実した学習カリキュラムなどがあるのを知り、羨ましい限りです。１期生は何もなかった分、自分たちでそのきっかけを作った感があり、これはこれで得がたい体験だったといえるでしょう。

式典の後の祝賀会では、アジア各国の料理を楽しみました。また地元東松山名物の味噌ダレ焼き鳥（豚）と地元マメ焼酎を頂きました。外国のことだけでなく、自国のことにも関心を持とうというこの学部らしい料理内容だなと思いました。先生方とも久し振りにじっくり話ができました。最近の先生方の研究内容や卒業生の動向などをお聞きしました。容貌から「先生もお年をめされたなあ」（失礼！）と感じましたが、式典でのスピーチや祝賀会でのお話は、２０年前の講義や雑談でのあの口調そのもの、なお若々しい印象でした。同期生も学生時代とは異なり随分と落ち着いた様子でしたが、少し話をしただけで、すっかり学生時代に戻ってしまいました。

東松山市長の祝辞

ティオティワカンにて（メキシコ）

式典のときに配布された２０周年記念誌を、帰宅後じっくりと眺めました。学部の歴史の回顧と展望を行う「対談」から自分たちの卒業後の学部の動きが分かりましたし、先生方の「寄せ書き」では、特にマーゲル先生の卒業生に対するメッセージが印象的でした。

残念だったのは、参加できなかった先生方、卒業生が多かったことです。もう少し多くの方にお会いできるかなあと期待していたのですが。また、このような企画がありましたら、是非参加したいと思っております。楽しいひと時を、ありがとうございました。

国際関係学部
20周年記念誌

祝賀会での
１期生

アジアミックス料理祭

ASIA MIX 2007

アジアミックスは、国際関係学部地域研究学会が主催するイベントです。今年は６月５日から７日まで３日間行われました。国際関係学部の専攻である「アジア」を、新入生を含む学部生とともに、他学部や学外の方にも体感してもらおうというものです。新入生にとっては、歓迎会とは異なり、初めて自分達が主催する側に立つイベントになります。

アジアミックスの特色として挙げられることは、学生による学生の為のイベントであり、学生同士ですべて運営ができるという点、自由度が高いという点、スタッフと参加者が共に楽しめる点などです。

アジアミックスの目的は「アジアを体感すること」にありますから、そのために毎年様々な工夫を凝らしています。今年は談話室でアジア雑貨販売・南アジアのタトゥー「メヘンディー体験」・アジア映画鑑賞なども行いました。キャンパスプラザでは、昼休みにプロの演奏家なども呼んで「アジア芸能鑑賞」が３日間、毎日異なるものが行われました。今年は恒例のガムラン演奏・ベリーダンス・トルンリンベのステージがありました。

なんと言ってもアジアミックスの目玉企画は、夕方５時からキャンパスプラザで行われる「アジア料理祭」です。今年も１日３ヵ国、３日間で各専攻言語９ヵ国の料理を振る舞い、普段では味わえない料理を体感して頂けました。

文末になりますが、アジアミックスは国際関係学部の顔とも言えるので、これからも発展し続けて欲しいと思います。

総合プロデューサー　国際関係学科３年

本間　圭亮

料理祭１日目

アジア雑貨販売

ガムラン演奏

料理班スタッフ

スピーチコンテスト

Speech Contest 2006

Asian Languages Speech Contest は、主に国際関係学部の学部生を対象にしたアジア９言語（中国・コリア・ベトナム・インドネシア・タイ・ウルドゥー・ヒンディー・ペルシャ・アラビア）と留学生による日本語の１０言語を用いて行われるスピーチコンテストです。

このイベントでは、私たちが日ごろ専攻言語として学んでいるアジア言語に対する学習意欲の向上、アジアに対する興味、関心を持ってもらうことを第一の目的としています。学生にとって、アジアの言語を学ぶことは、アジアに対する興味を持つ第一歩だと思います。また、自分の気持ちをアジアの言葉で話すことが、より深くアジアについて考えるきっかけになったり、アジアへの興味がより深まることに繋がるのではないでしょうか。

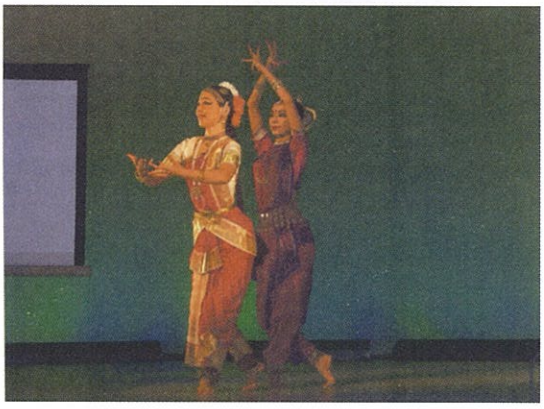
第９回では、「多国籍な空間を作り上げ、始まりから終わりまで出場者の皆さんや観客の皆さんに、飛行機に乗ってアジアの言語を聞く旅に出てもらおう」というコンセプトでスピーチコンテストを作り上げました。プログラムの表紙を飛行機にしたり、オープニングを飛行機搭乗時のようにするなど演出に力を入れ、アジアをより身近に感じられるような空間作りを目指しました。１９９８年に始まったAsian Languages Speech Contest は、２００７年で第１０回目を迎えます。これからもより多くの人がこのイベントを訪れ、アジアに興味、関心を持っていただけるようなイベントであり続けて欲しいと思います。

第９回プロデューサー　国際文化学科４年

大信田　純

表彰式

民族衣装でのスピーチ



幕間のインド舞踊

終了後、スタッフ全員集合

2006年度 現地研修報告

Thailand タイ

Edward Mergel

The 2006 Thailand Study Tour to Chulalongkorn University in Bangkok took place in September and October, and consisted of 26 students, 17 female and 9 male, with 14 students going overseas for the first time. What a pleasure it was, to escort these young people abroad, for they taught me so much about the value of cooperation. Allow me to describe a few key moments of the tour by repeating the students' words, followed by my comments and/or replies in parentheses.

"Mr. Mergel, are we really going to go to Thailand? Is it safe in Bangkok?"
(Yes, it was safe in Bangkok and everywhere we went in Thailand. The coup was not a problem for any of the students. As one of the students wrote in his tour report: "It was a Thai-style coup. The people were protesting against the military, not the king. There would be a real revolution if they protested against the king.")

"Mr. Mergel, the students at Chulalongkorn University are so serious, and none of them smokes!"
(Very true. We are now at one of the best universities in Southeast Asia! Don't forget, "When in Rome, Do as the Romans Do!")

"Mr. Mergel, I'm not sure what I want to do in the future, but I think this tour has helped me think about that. I think I want to help people in the future."(a student on the farewell boat cruise, while crying)
(Bravo! Do what your heart tells you. And don't think about the nationality of the people you are helping.)

"Mr. Mergel, we made it back to Japan safely. I'll never forget the time I spent in Thailand. I want to go back to Thailand again!"(a student at Narita airport)
(Now you understand why we went to Thailand!)

In class with the teacher at Chulalongkorn University

On the evening of the farewell cruise

Egypt エジプト

松本　弘

アラビア語の現地研修は、エジプトにおいて行われる。２００６年度は９月２日から２５日までの日程で、３年生６名と２年生１４名の計２０名が参加した。

４日から１７日まではアレキサンドリアに滞在し、アレキサンドリア大学のアラビア語学教員が運営するAlexandria Center for Languages で語学研修を受講した。講義は英語で行われたため、最初は戸惑う学生も多かったが、次第に慣れてくると、学生は宿舎のホテルで夜通し予習や復習をし、また講義自体を楽しむような余裕も垣間見られた。時に厳しく、時に学生各人のレベルにあわせた丁寧な授業を、教員が行なってくれた賜物と思う。

アレキサンドリアでの午後や休日、さらに残りの日程に滞在したカイロやルクソールなどでは、遺跡などを視察するのみならず、スーク（市場）をはじめとする市街の日常に積極的に繰り出し、アラビア語の実践とエジプト社会の理解のための貴重な経験を積んだ。

スフィンクスの横で（カイロ）

語学研修の先生と（アレキサンドリア）

China 中　国

大石　敏之

これまでに実施されて来た中国における現地研修の概要は下記の如くです。

期間：夏休み中の３～４週間程度

主たる研修地：北京市　北京大学　中央民族大学
（２００７年度は中央民族大学のみ）
上海市　上海師範大学

研修内容：言語学習が中心

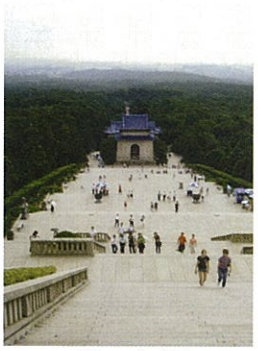
研修に参加する動機は人によって様々でしょうが、その意義となると、月並みになりますが、やはり自分の目で現地を見る、実際に現地の生活を体験する、その結果カルチャーショックを受ける、というようなところではないでしょうか。所謂「百聞不如一見」ですね。学生諸君には、積極的に参加して大いに見聞を広めてもらいたいと思っています。

ただ、一方で、書物・文献で学ぶことも欠かすことはできません。研修に参加する・しないにかかわらず、当該地域に関する基本的な知識を身に付けて置くことは非常に大切なことです。中国に関して言えば、アヘン戦争以降の歴史についての知識は必須です。

ところで、研修に参加した諸君がよく「（行く前に）もっと中国語を勉強しておけばよかった…」と言うのを耳にします。その通り！御意！でも、「今からでも決して遅くない」のです。学生諸君が研修参加後、学習意欲が従前にも増して高まり、一段と成長して行く姿を目の当たりにするのは教員として嬉しいことですし、報われたと感じる時でもあります。

毎年この規模で研修を行っている大学（学部）は他には多分ないでしょう。教職員、学生がお互いに協力して、研修のみならず、学部全体をより一層発展させて行きたいと思っています。

上海浦東の夜景

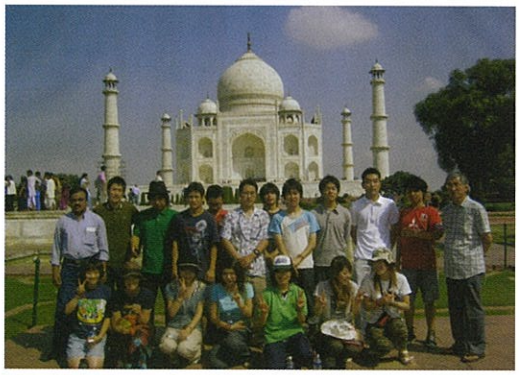


南京　中山陵
（孫文の墓）

India インド

石田　英明

２００６年度は インド現地研修は ９月１４日から１０月８日にかけて行われた。参加者は１７名（全員２年生、男子１０名、女子７名）。９月１４日に成田からインド航空AI３０７便で出発、同日ニューデリーに現地時間の午後６時に到着。翌日にはヒンディー語研修が行われるジャイプルへ移動。市内観光などしながら準備を整え、１８日からラージャスターン大学の南アジア研究センターで語学研修を開始。語学研修は１８日～２３日（２２日振り替え休日）と２５日～２９日の合計１０日間。慣れない環境の中で学生たちはヒンディー語の上達を目指して頑張った。３０日からは名所観光でアグラ、ベナレスと回り、１０月４日にニューデリーに戻って、7日にニューデリーを出発（AI３０６）、翌８日午前１０時に成田に帰着。延べ２５日間の日程で最後はかなり疲れていたが名残惜しい帰国となった。帰国後はレポートを作成して現地研修の仕上げを行った。ヒンディー語の語学研修は２００７年度からニューデリーのネルー大学に変更されるので、ジャイプルでの語学研修はこの年が最後となり、その意味では記念すべき現地研修となった。



アグラ
タージマハルの前で

ジャイプル
町の子供たち

インドネシア

国際文化学科４年　小髙　蕗子

私は２００６年２月からの１年間、インドネシアのバンドゥンに留学をしていました。留学のきっかけとなったのはゼミの先生からの勧めでした。「留学をしてみたい」という漠然とした思いはあったものの、なかなか踏み切れずにいた私の背中をポンと押されたことで、奨学金留学に応募したのがはじまりです。しかし、いざ留学が決まってみると、何の手続きから始めていいのかと迷ってしまいました。特に就学ビザを取得するには、時間がかかり大変でした。何度もインドネシア大使館へ行き、説明を聞いたり、書類を提出したりしました。私の留学はインドネシアへ出発する前からすでに始まっていました。

留学生活が始まると、毎日が驚きの連続でした。道端で物乞いをする人々、早朝から礼拝の時間を知らせるアザーン、賄賂の横行など日本とは全く異なる生活圏で暮らすことで生じてくる違和感を覚え始めました。特に日本と異なると感じたのは、宗教についてです。インドネシアでは９０％以上の国民がイスラム教徒のため、至る所にモスクがあったり、宗教上の様々なタブーがあったりと、日常生活とイスラムが密着しています。学校の授業やホームステイ先の家族ともイスラムについてはよく話しました。近年、世界中でイスラムへの関心が強くなっている中で、こういう機会があったことは、イスラムの正しい知識を身に付ける上でとても勉強になりました。私自身も１ヶ月の断食を体験したことで、イスラムはどのような宗教なのか身をもって感じることができました。朝３時に起きて、食事を済ませ、日が落ちるまでは一切飲食はしません。ここまではよく知られていることですが、実はその他にもいくつかの決まりが断食中にはあります。極度に怒ったり、笑ったり、泣いたりしてはいけないなどです。つまり、全ての意味で自分をコントロールしなければならないのです。このことにより、自制心を養うことができるのだと私は思いました。１ヶ月の断食を終えると、とてもすがすがしい気持ちになりました。この経験は留学生活の中で、ひとまわり私を成長させてくれました。

１年間の留学生活はあっという間に過ぎてしまいました。インドネシア語を学ぼうと思い決意した留学でしたが、結果的にはそれ以外にもさまざまなことを学ぶことができました。嫌なことも、辛いこともありましたが、それも含めて本当にいい留学になりました。この留学はお金では決して代えられない、私にとって一生の宝物になりました。

この経験をこれからの将来に役立てられたらと思います。

クラスメートと

カナダ

国際関係学科４年　長勢　綾乃

出会い

私は２００６年４月から１１ヵ月間、カナダのバンクーバーに留学しました。バンクーバーで経験した沢山の出会いは私にとって本当に宝物です。私にとって第二の家族であるホストファミリーや、苦楽を共にした友人、お世話になった先生方などとの出会いはもちろんのことですが、その他にも私は、忘れられない出会いをバンクーバーで経験しました。それは、毎朝登校途中で手を振り合った郵便配達員のおじさんや、家の近くでよく犬を散歩に連れていたおじいさんとの出会いです。名前すら知らず、会話らしい会話は一度も交わしたことはないけれど、手を振り合うことや、「おはよう」や「こんにちは」の挨拶を言い合うことが自然と日課になり、会えた日はそれだけで嬉しい気持ちになれました。知らない人に挨拶するのが当たり前のカナディアンらしい、この小さくも心温まる素敵な出会いを私は忘れません。

教室にて

よく歩いた道

モンゴル

国際関係学科２年
Otogonbaatar Ochirhuyag
オトゴンバータル　オチルホヤグ

～草原の都～ ウランバートル

ウランバートルは海抜１，３５１メートルに位置し、気温は最高３５度、最低はマイナス３０～３５度まで下がる、世界一寒い首都だ。ほとんどの外国人はモンゴルと言えば広大な草原、満天の星空、遊牧民、馬、ゲル（移動式伝統住居）を思い浮かべるだろうが、人口１００万人の都市ウランバートルはちょっと違う。

初めて会う日本人に「モンゴルでは馬で通学するんですか」「モンゴルに建物はありますか」などと聞かれたことがかなりある。それで、今回のニューズ・レターについて聞いた際に、真っ先に頭に浮かんだのはこのテーマだ。

今年５月に人口１００万人となったウランバートルはモンゴルの政治、経済、文化や教育、科学技術の中心地にもなっている。１９８０年代までは旧ソ連の影響も強く、ソ連式の都市計画が行われていたが、市場経済導入以降新たな都市計画も立てられて、今は建築ブームだ。知らない間に新しい建物がたくさん建てられて街の顔が変わりつつある。この間久しぶりに帰国した時、街の雰囲気や至る所に建設されている建物を見て、何となく変わったなと思った。

市場経済を導入したここ２０年でモンゴルは大きく変わった。人々の生活様式から若者スタイルまでその変わりぶりは大きい。最近、中古車の輸入ラッシュで朝夕は大渋滞になるくらい車の数が増えている。携帯電話会社の急成長によって利用者が急増し、携帯電話を片手に歩く人々をよく見かけるようになった。

また、最近ショッピングセンターやレストランも次々とオープンして市民の生活が便利になっている。ウランバートルにいながら各国料理や海外有名ブランド品を買ったり、食べたりできる。しかし一方で人口や車の増加によるゴミや大気汚染、騒音などがここ数年大きな問題になっている。

良いことも良くないこともありながら、草原の中にぽっかりと浮かぶ街、ウランバートルは近代都市へと生まれ変わっている。この変化はこれからもずっと続くだろう。

ウランバートルにて

新住宅街

ネパール

国際関係学科２年
Rajkumar Dhakal
ラージクマール・ダーカル

ネパールから留学しているラージクマールです。私の故郷はカトマンズから車で３時間ほどのダーディンです。小学校高学年からは家族とともにカトマンズに移りました。故郷では学校建設に尽力される日本人ボランティアと交流がありました。カトマンズではJICAの現地活動に触れ、日本についても好印象を持ちました。

２００４年に来日し、１年半の日本語学校を経て、大東文化大学に入学しました。当初、日本食を食べることができず、自炊していました。ヒンドゥー教徒なので牛肉が口に入らないように注意しました。最近、日本食に慣れてきたので外食もするようになりました。お好み焼きとたこ焼きが特に好きです。

日本でたいへんなのは、漢字の読み書きです。どんなに漢字の練習をしても、なかなか頭に入ってきません。物価が高いのも悩みの種ですが、少しアルバイトをして生活の足しにしています。楽しいこともたくさんあります。ゼミは先生やゼミ生と気兼ねなく交流できるかけがえのないひと時です。ネパールからの友人と休日を過ごすのも大きな楽しみのひとつです。卒業後は、日本とネパールの交流に役立つ仕事につきたいとおもっています。

ゼミの先生のお宅にて

ネパールの友人と

卒業生便り

国際文化学科　１９９５年度卒業　　須佐　康子

桜の匂いが濃くなる頃、かの丘に建つ校舎のことを思い出す。教室から見えた山、ガラス張りの廊下からの夕景、中庭の池に降る雨の模様。スキーサークルの居候の事も仲間との飲みも上海研修の壮大な話も書きたいが、これと最初に浮かぶのは、さてもあの校舎の光景なのだった。物を書いていて励まされるのはたいていが記憶の隅に居座るディテイルで、例えばアジアミックスの豚耳がどうにもならない味だったとか、ゼミ仲間と飲んだ夜、電車が無くなって線路を辿って家まで帰ったこととか、学食のカレーの具は溶けてしまって無いのかそれとも最初から無いのかとか、そういう瑣末な記憶をなぜか真髄みたいに思い出すこと。それは私がこの国際関係学部という所をやたらと愛している事に繋がってしまうから困る。バックパックで世界中を旅しながら我々はきっとずっと何処かで繋がっていると思わせてくれるようなこと。ということで学生時代は、本当にお世話様でした。

（２００７年第１８回朝日新人文学賞受賞）

スキーサークルの冬合宿（長野にて）

田辺ゼミのメンバー
（卒業式にて）

国際文化学科　１９９３年度卒業　　田澤　晃子

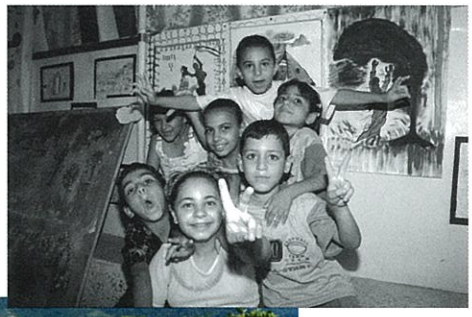
卒業してからは、都内の出版社に勤務している。発刊しているのは主に仏教関係の出版物だが、国内外の諸宗教、宗教者たちの取り組みを取材する機会も多い。在学中、「比較宗教学」の講義で学んだ世界の諸宗教には、もれなく触れたと言えそうだ。まが、ＮＧＯや諸宗教協力による平和活動を追いかけ、これまでアジアや中東、南米などへも赴いた。

どこに行ってもいつもワクワクする。何の気負いもない。体調を崩すこともない。加えて、上司や同僚から心配してもらったことさえない。その理由を考えたとき、心に浮かんだのはレンガ色の東松山校舎だった。

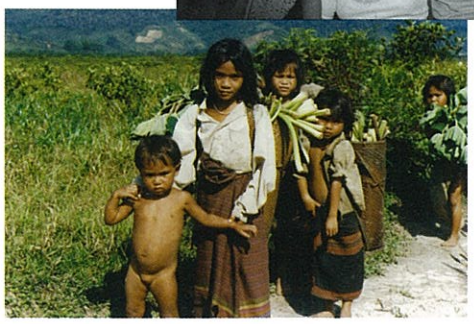
先生方の講義やユニークな体験談は言うまでもなく、レポートや卒業論文を提出するために必死で読みあさった文献、世界各地を旅した友人や各国からの留学生との出会い……。「学生証を持っていただけ」のいい加減な大学生活ではあったが、そんな私でも実にさまざまなことを学んでいたと気づいた。４年間で得た知識や経験が、どこの国、どの文化に飛び込むときも大きな安心を与えてくれる。一層の好奇心さえ掻き立ててくれるのだ。

先日もレバノンへの出張の際、急遽、ある先生に中東情勢についてレクチャーをして頂いた。突然泣きついてきたダメな卒業生に、母校はとても温かかった。そして、いろいろな知識を得ることは、本当に楽しいと感じた。

これからも自分の人生を豊かにするために、さまざまなことを「知る」「学ぶ」努力を続けたい。その方法の一つとして、母校にももっと甘えていこうと思っている。



レバノン
パレスチナ
難民キャンプで



ベトナム
ラオス国境に
近い村で

在校生報告

国際関係学科　２００６年度卒業　　鯉渕　梓

希望を信じて

私が、卒業論文で「ベトナム戦争における枯れ葉剤の影響」というテーマを選んだ理由。それは、小学生の時に読んだ１冊の本がきっかけだった。

戦争なんて遠い昔の話で、ましてや他の国のことなんて考えたこともなかった。そんな私がベトナム戦争中に使用された枯れ葉剤の影響で、戦後も苦しみ続けている兵士たち、そして新たな生命にまで障害を残している現実を知り、「戦争」というものの恐ろしい姿をそこに見た。

現在も、その枯れ葉剤の影響で多くの被害者が苦しんでいる。そして、その責任追及と被害者に対する補償をめぐって訴訟が続いている。この枯れ葉剤問題はまだ解決されていないにもかかわらず、時と共に忘れ去られようとしている。

その枯れ葉剤が残した傷跡は…。小学生の頃から思っていたこの疑問に卒論という形で私は向き合っていきたいと思った。

被害者の現状を知るため、そして被害者のために何かしたいという思いから、わたしは「愛のベトナムさわやか支援隊」というボランティア団体と共にベトナムへ行き、被害者のお宅を１軒１軒訪ね、補聴器や車イスを届けた。

補聴器を付け家族の声を聞いた。車イスに乗って空を見上げた。

その瞬間、彼らの表情に笑みがこぼれた。何もかも諦めてしまっていた彼らの目の前に、希望に満ちた未来が見えた気がした。

私は卒論という場で彼らの思いと矛盾だらけの現実を伝えた。しかし、それで終わりだなんて思っていない。被害者にとっては何も終わってない。今も彼らはつらい現実と戦っている。私も彼らと共に戦おう。卒論を書き終え、私はそう心に決めた。

（２００６年度卒論学部長賞受賞）

補聴器を付けて
とても喜んでいる様子

車イスの使い方の指導

国際文化学科４年　　青木　豊

弓道のこと

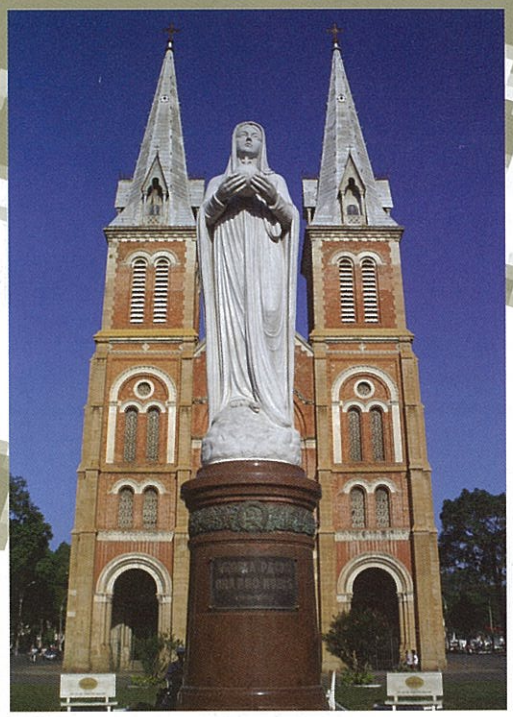
弓道を始めて今年で７年目になります。高校から始めた弓道ですが、自分でもなぜだかわからないぐらい一生懸命にやってきたなぁ、と思います。大学に入った理由の一番も弓道を続けたかったからでした。という訳で、大学生活は文武両道とはいかず、勉強そっちのけで部活にいそしんでいる毎日です。

さて弓道ですが、弓道で一番大切なことは何か？なかなか難しいですが、集中することでしょうか。ですが、ただ集中しようとして集中しているのは本当の集中ではないと思うのです。弓道は矢を的に中てるスポーツですから、的に中てたいと思うのは必然的なものです。しかし、それは欲という雑念でしかないのです。自分自身が自分の射に迷いなく、雑念を振り払い無心になれた時こそ本当に集中しているのだと思います。そしてそれは、自分を信じる強い精神力があってこそ成り立ちます。

学生生活での弓道は今年で最後になります。今、思うことは…四年生になんかならなきゃよかった！です。

試合にて

みんなで楽しくレク



サイゴン大教会（ホーチミン市）

ホーチミン廟（ハノイ）

DAITO BUNKA UNIVERSITY

INSTITUTE OF CONTEMPORARY ASIAN STUDIES

ASIA 21　ニューズ・レター2007
2008年2月

編集人：大東文化大学国際関係学部　現代アジア研究所広報出版部会
発行人：押川 典昭
発行所：大東文化大学国際関係学部　現代アジア研究所広報出版部会

〒355-8501 埼玉県東松山市岩殿560
TEL:0493-31-1523　FAX:0493-31-1524

編集・制作・印刷：株式会社 ヨハネ